

<巻頭言>

チェルノブイリの事故に思う

岡 本 舜 三*

スリーマイルス島に続いてチェルノブイリの事故があった。信頼性理論を用いて何万分の1という確率で保証されていた筈のスペースシャトルや日航機が落ちた。日頃安全第一を目ざして努力してきた私には面にこそ出さないがショックであることは間違いない。

そんな時九州の飛行場の待合室でたまたまあった老先生との会話を思い出す。この方は文部省の会議で面識のあった神学の大家である。「君はどこに行ったのか。」「原子力発電所の帰りです。」「原子力は神様だけが手をつけ得るもの、人間が手を触れてはならぬものだ。」「でもそれではエネルギーが不足して、こうして安穩とテレビも見ておれなくなりますよ。」「いや、エネルギーは別の方法で作ればよい。」「私には納得しえぬものがあったが丁度改札も始まったのでそのまま別れた。

それ以来何か事がおきるとこの会話が頭をかすめる。しかし考えてみるとこうしたことは原子力に限ったことではなく、世の中には似たような事例が多くあるように思われる。してみれば古くからこうした問題に心を砕いた人が少なからず居たに違いない。そう思って私は哲学を学ぶ若い学徒にきいてみた。さすがに専門家である。旬日のうちに次の二つのお話を教えてくれた。

国内を遍歴していた孔子が弟子の子路に畝を耕している隠者と思える人に渡し場の位置を尋ねさせた。隠者は言った。「おまえは誰だ、孔子の弟子か。」「そうです。」「天下は乱れて手のつけようがない。こうした形勢を一体誰とともに革めて治めようというのか。意見の合わない人士を避けて自分と意見のある諸侯を探し求めて漂泊する人(孔子)につき随っているよりも、いっそのこと人の世を避けている人士(自分)に随っていった方が良いのではないか。」「そう言って彼は畝に種を蒔き土をかけ続けた。

子路はそれを孔子に告げた。孔子は言った。「人の世をさけたところで鳥や獣と群れを同じくして住むことは出来ない。人は所詮人の世に住む以外にない。天下に道があれば私はそれを変えようとは思わない。乱れて道がないからこそ乱れを革めて道を立て、治めようとしているのだ」と。その子路が師の供をして旅に出て師に遅れたとき、杖で竹籠を荷った老人に出会った。子路が尋ねた。「うちの先生を見かけませんでしたか。」「手足も動かさず、五穀も作らないでいて誰のことを師というのだ。」「そういって老人は草刈りを始めた。これはただ者ではないと悟った子路は敬意を表して立っていると、やがて老人は子路をひきとめて泊らせ、鶏を殺し黍をこしらえて食べさせ、二人の子供を引き合わせた。翌日追いついた子路がこのことを師に伝えた。孔子は「それは隠者だ」と言って子路に引き返して今一度会わせようと言われたが行ってみると既に立ち去っていた。

人間と鳥獣と群を同じくすることは出来ないという孔子の言葉、孔子が隠者と話し合おうとしても隠者はいずれかに立ち去ってしまっていたということ、このへんがこの話のポイントではないか。隠者の

* 東京大学名誉教授

主張には部分的な正当性がないわけではないが、その主張を全面的に認めてしまうとき、人間の人間たる所以、文明文化を全否定しなければならなくなる。また隠者という存在は自己の主張を一方向的に述べるだけで他とのかかわり、討論を避ける。その意味で独善的存在であると孔子は教えているようだと言った。

幸いにもわが国にはダム事故はおきていないが、スリーマイルス島から続く一連の事故はたしかに我々の自信へのショックであった。しかし孔子の言の如く、開発から身を隠して鳥獣と群れて住むわけにはいかないし、べきでもない。我々はより一層の自信をもって仕事が進められるよう、自信の源泉である勉強と経験を更に深めなければならないのである。